

斑点米カメムシ類の近年の発生様相の変化について

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 植物防疫研究部門
作物病害虫防除研究領域 グループ長補佐 平江雅宏

斑点米カメムシ類は、成虫や幼虫がイネ *Oryza sativa* の穂を吸汁加害することによって米粒の一部または全体を変色・変形させ米の品質を著しく低下させる。斑点米被害を引き起こす主要なカメムシ種は地域によって異なるが、その発生様相は地球温暖化など気象の影響、牧草地・雑草地の増加や水稻品種の変遷などの水田利用状況および栽培環境の変化などにより変化する。例えばアカスジカスミカメ *Stenotus rubrovittatus* では、1999年以降にそれまで発生が問題となっていなかった地域で分布域の拡大や発生量の増加が全国的に認められ、現在東北地方では主要種がアカヒゲホソミドリカスミカメ *Trigonotylus caelestialium* からアカスジカスミカメに置き換わっている状況である。ここでは、近年発生様相の変化が認められているクモヘリカメムシ *Leptocoris chinensis*、イネカメムシ *Niphe elongata*、ミナミアオカメムシ *Nezara viridula* の3種について取り上げる。

■ミナミアオカメムシ

(図1右) 熱帯から亜熱帯域に生息する南方系の種で、イネや大豆をはじめ広範囲の植物を加害する。成虫越冬で1月の平均気温が5℃以下のところでは越冬できないとされている。本種は1950年代頃には九州南部や四国南部、紀伊半島南部などの本州西部の南岸のみに分布していた。ところが近年は冬期の気温上昇により越冬可能地域が拡大し、現在では関東・東海・近畿・中国地方で発生が確認されている。分布の拡大は続いており、2020年には埼玉県と茨城県で、2021年には栃木県で発生が確認され病害虫発生予察特殊報が発表されている。

今回取り上げた3種とも斑点米カメムシ主要種の中で大型種であり、イネの穂を吸汁加害することにより斑点米だけでなく不稔粒やしいな粒を発生させるなどの甚大な被害を引き起こす可能性がある。このため、これらの種の既発生地域や分布拡大が危惧される地域では、今後の



図1 クモヘリカメムシ (左)、イネカメムシ (中)、ミナミアオカメムシ (右) 成虫

■クモヘリカメムシ

(図1左) 熱帯を起源とし、国内では九州、四国、本州に分布する。成虫で越冬し、2月上旬の最高気温平均が4.7℃を越える地域で越冬可能とされる。これまで本種の分布北限は太平洋側では宮城県南部の沿岸部や福島県、日本海側では新潟県南部の沿岸地域や佐渡となっていたが、近年の温暖化の影響により東北・北陸地方で分布が拡大しており、岩手県では2019年に本種成虫が確認されたほか、宮城県や福島県、富山県、新潟県では発生地域の拡大や発生量の増加が確認されている。

■イネカメムシ

(図1中) 国内では関東以西に分布する。成虫で越冬し、本州では年1回発生するが、暖地では年2回発生となる場合もある。本種は古くからイネの主要害虫として知られていたが1970年代後半以降は水田での発生がほとんど確認されていなかった。しかし、近年、関東・東海・近畿・中国地方などで発生が増加し斑点米の被害や不稔による減収の被害が認められている。

発生について注視していく必要がある。

参考文献：

- 石島力 (2021) 近年増加しているイネカメムシの発生状況と調査法. 植物防疫 75:364-368.
- 黒田貴仁ら (2021) 富山県内におけるクモヘリカメムシの発生活長および分布域. 北陸病虫研報 70:61. (講要)
- 水谷信夫 (2013) 我が国におけるミナミアオカメムシの最近の分布および発生状況. 植物防疫 67:595-601.
- 田淵研ら (2015) 東北地域における斑点米カメムシ類：2003-2013年の発生動向と被害実態. 東北農研研報 117:63-115.
- 田淵研ら (2020) クモヘリカメムシ (カメムシ目ホソヘリカメムシ科) の岩手県からの初分布記録、被害発生状況および越冬可能地域. 北日本病虫研報 71:108-113.
- 友国雅章 (1993) 日本原色カメムシ図鑑. 全国農村教育協会 東京：380 pp.
- 山代千加子 (2012) クモヘリカメムシの発生活態と防除対策～新しい斑点米カメムシ～. にいがた植防だより 133:4.